

「戦後 80 年所感」に対する意見（日本キリスト教会大会靖国神社問題特別委員会）

内閣総理大臣 石破茂様

私たちは、あなたが内閣総理大臣を辞任する意思を表明した後であっても、強い志を持って、「戦後 80 年所感」を公表したことに敬意を表します。閣議を経た談話ではありませんが、内閣総理大臣という責任ある立場において誠実で真摯な所感を表明されたことは、国内外で、いまだ戦争の惨禍に苦しむ人々に、自分たちがまったく無視されているのではないことを自覚させる重要な役割を果たしたと考えます。一方で、「戦後 80 年所感」には、50 年・60 年・70 年談話の歴史認識を引き継ぐという文言があるものの、アジア・太平洋諸国の戦争被害者に対する謝罪の言葉が一切なく、極めて残念に思います。50 年の村山談話、60 年の小泉談話では、アジア・太平洋諸国に対する加害責任が明白に表明されていますが、70 年の安倍談話はまったく異なる歴史認識に立脚しており、これらを同時に引き継ぐことはありえません。無定見であるとともに、「戦後 80 年所感」を発出するためだけに形式を整えた自己満足の所産ではないかと疑われる余地があります。

「戦後 80 年所感」では、戦争を食い止められなかった政治の責任に関して、文民統制の不在という大日本帝国憲法の問題点、統帥権独立による軍の政治関与、議会による軍の統制機能喪失、批判力を失ったメディアによる戦争支持報道、国際情勢・軍事情勢の情報不足などに関する詳細な考察が述べられ、今日への教訓として、政治が自衛隊を使いこなす能力と見識を十分に有する必要があるとともに、自衛隊には専門家集団として政治に対し積極的に意見を述べるのが求められるとし、議会とメディアがチェック機能を果たして政府がポピュリズムや過度な商業主義、偏狭なナショナリズム、差別や排外主義を抑制しなければならないと述べられています。私たちは、あなたが強調されたシビリアンコントロールの大切さに関しては、大いに共感するところです。

しかし、戦後の日本が決意したのは、日本国憲法が高らかに宣言しているように、「平和を愛する諸国民の公正と信義」に対する信頼によって恒久の平和を願うことであり、「自国のことのみに専念して他国を無視してはならない」という原則を守り、一切の武力・戦力を保持しないということでした。戦後 80 年の今こそ、この方針を確認することが肝要であり、自衛隊に政府への積極的な意見開陳を求めるということは言語道断です。戦後 80 年の今日、パレスティナやウクライナにおける戦争によってもたらされている世界の分断と将来に対する不安を鑑みると、軍事力の強化や自国優先の経済政策によっては、決して平和の実現はあり得ないというのが私たちの歴史認識であり、肌感覚を伴う実感でもあります。また、かつての戦争において人々が戦争を支持した要因として、物価高や食糧不足による生活苦を脱したかったという切実な生存要求があったことも看過してはなりません。

さらに今日の日本における経済の低迷、先行きの見えない不安感、格差社会と自国民・自民族ファーストによる外交政策の軽視は、次なる戦争への契機となりかねないこととして、危惧します。

日本キリスト教会も、かつて積極的に戦争に加担した歴史を持っており、いかにして、罪を悔い改め、戦争被害者の方々と和解することができるのかを追究し続けています。

詩篇 130 篇は「主よ、わたしは深い淵からあなたに呼ばれる」（口語訳聖書）という呻吟で始まりますが、「あなたにはゆるしがあるので、人に恐れかしこまれるでしょう」という賛美と信仰告白が続きます。私たちは、自らの罪が神と隣人によって赦されるものであることを確信しており、それ故に、キリストによってもたらされた罪の赦しの恵みを宣教し、それに基く奉仕に励むことを使命としています。私たちは、あなたがキリスト者であることを表明していることを知っており、世代と国境を越えて、罪の赦しに生きる喜び、平和を希求して生きる使命を共有しているものと信じております。

不安定な政治状況が続いていますが、私たちは、あなたが神と隣人の前で、誠実な職務遂行者として歩まれることを願っております。

主イエス・キリストの平安がありますように。

2025 年 10 月 13 日

日本キリスト教会大会靖国神社問題特別委員会
委員長 条広国